

ポストモダンな学びの構築

Construction of Learning for Post-modernity

- 私塾におけるその理論と実践 -

北村 真也

KITAMURA Shinya

立命館大学大学院 応用人間科学研究科

(Graduate School of Science for Human Services, Ritsumeikan University)

Keyword: 正統的周辺参加、変容学習、羅生門的現実

概要

本稿の舞台は、「アウラ学びの森」という一つの私塾である。この私塾は、筆者自身がポストモダンな社会に対応する新しい学びの形を理論化し、それを私塾というフレームの中で現実化したものである。アウラが設立されたのは、2000年である。そして現在に至るこの10年の間に1000名を超える子どもたちや教師たち、そして親たちがそこにかかり、それぞれ変容を遂げてきたのである。本稿においては、そんなアウラの学習者たちの変容の様子をエピソードとして取り上げながら、そこに浮かび上がる複数の文脈をいねいに見つめ直していくことで、ポストモダンな新しい学びの構造を再考していく。

内容

本稿の具体的な内容としては、1章で、様々な教育問題をモダンな時代にデザインされた教育システムとポストモダンな時代に生きる子どもたちの生活世界との乖離として捉え、さらに、その乖離の中から新しい教育に求められる要素を抽出していく様子を述べられている。2章では、私自身がポストモダンな学びの場としての「学びの森」を立ち上げ、3つ理論を引用しながらそれらを具体的に現実のものとしていく過程、そしてさらには、この学びの森を固定化するのではなく変容させながら維持していくための仕掛けについて述べられている。3章では、ポストモダンな学びを考える上で最も重要な「変容」に注目し、社会との関係、さらには変容学習理論、そして「変容」と「構築」という、相反する要素を併せ持つことの重要性、さらにはそれを可能にする階層的思考について述べられている。4章では、2種類の再帰性が交差し、ますます不透明となっていくポストモダンな社会においては、再帰的に自己自覚的に自分自身を定義し続けることが重要であり、新しい学びはまさにそのことを実現させるためにあるということが述べられている。

方法

最後に本稿の記述方法について触れておく。本稿は私塾「アウラ学

びの森」におけるポストモダンな学びの実践を2009年10月より2010年8月までの10ヶ月間にわたって記録された400ページを超える膨大なダイアログ・エピソードデータに基づいている。筆者は、そのデータを生徒編、教師編、保護者編、セルフトーク編、さらには、指導教員との対話を描いた省察編の5種類の層に分け構造化した別冊資料を作成し、そのデータから一部を本稿に引用している。(本稿において引用データはポイントを落とした文字で表記しているとともに、エピソードデータに関しては倫理審査委員会の承認を得ている 承認番号: 衣笠-人-2010-19) また本稿の最大の目的は、ポストモダンな学びの実践の理論化であって、ある特定の理論の検証を目的とするものではない。あくまでエピソード分析がその軸にあり、それを理論化するために関連する先行研究を整理しながら引用するものである。さらに、それぞれのエピソードは、決して恣意的に並んでいるわけではない。それは文脈をもったシークエンスの上に成り立っている。そこにはアウラに関わる子どもたちや教師たち、そして塾長である筆者自身のシークエンスがあり、さらにアウラ全体のシークエンスがあって、共時的な関係性を作り上げている。アウラの教室の真ん中にある大きなヘゴの木が、毎年10センチずつ大きくなり、そこに確かな時間を刻んでいくように、アウラの学習者たちは変容を遂げていくのである。本稿では、エピソードを媒介としながら、そこに浮かび上がる様々な人たちのシークエンス、文脈、変容、構築、ダイナミックスをできるかぎり描いていきたいと思っている。

参考文献

- J.レイブ/E.ウェンガー 佐伯胖(訳) 1993 『状況に埋め込まれた学習』 産業図書
J.ボードリヤール 今村仁司/塚原史(訳) 2006 『消費社会の神話と構造』 紀伊国屋書店
Mezirow, J. 1991 *Transformative Dimensions of Adult Learning*. Jossey Bass Inc., Publishers
G.バイトソン 佐藤良明(訳) 2000 『精神の生態学』 新思泉社